

スロー社会学の試み(2)
—「多様性社会シナリオ」についてスロー・シンキングする—

森 真 一

Doing Slow Sociology about “Diversity Society Scenario”

Shinichi MORI

スロー社会学の試み(2) —「多様性社会シナリオ」についてスロー・シンキングする—

森 真 一

Doing Slow Sociology about “Diversity Society Scenario”

Shinichi MORI

要 約

前稿「スロー社会学の試み(1)－問題意識－」では、スロー社会学という姿勢や問題意識について述べ、社会学的思考の中核を占めるのがスロー・シンキングであると主張し、スロー・シンキングの実践をみせることの意義について論じた。それにつづく本稿は、「多様性社会シナリオ」という文書を素材に、スロー・シンキングの実践をみせることを目的としている。

キーワード：スロー社会学、「多様性社会シナリオ」、制限された多様性、意欲と能力

1. 「多様性社会シナリオ」を入り口にする

前稿の「スロー社会学の試み(1)－問題意識－」で予告しておいたように、本稿では、私なりのスロー・シンキングの様子をみせることをねらいとしている。前稿でC.W.ミルズが「ファイル」を公開しているのを紹介したが、本稿はそれにならっている。

素材としては国土交通省（以下、国交省と略す）の文書「多様性社会シナリオ」をあつかっている。私は2017年度から「ダイバーシティの社会学」という科目を講義することになった。ダイバーシティ（diversity）の専門書など読んだことがない私にダイバーシティに関する研究業績などももちろんない。ダイバーシティが日本語では「多様性」と訳されていて、テレビで最近よく「みんな違って、みんないい」とか「違いを認めあおう、違いを尊重しよう」などという文句はよく耳にしていた。性的（セクシャル）マイノリティ、LGBT、障害者等々の人びとが、そういう番組では取りあげられていることが多かった。差別や人権といったデリケートなことがらをあつかわないといけなのだろうなどと推測しながら、まずネットでいわゆる「ネタ」を探した。そこでヒットしたのが「多様性社会シナリオ」だったのである。

スロー・シンキングは、なにからでもどこからでもはじめることができる。以下、「多様性社会シナリオ」を紹介することから、スロー・シンキングしていく。

多様性社会シナリオ

本稿が取りあげる「多様性社会シナリオ」とは、国交省のホームページに掲載されている、「2030年の日本のあり方を検討するシナリオ作成に関する調査概要」（<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/futurevision/index.html>）の一部である。いつ調査したのか明記されていないが、当該ページの一番下にある著作権取得の年は2004-5となっているから、だいたいその前年ぐらいから調査がおこなわれたということなのだろう。なんのためにこんな調査を国交省はしたのか。

2007年から人口減少が始まり、国民の間で不安・不透明感が拡大。地方中小都市の衰退、維持困難な地域の拡大、森林・農地の荒廃などの課題が表面化。21世紀中も経済社会の活力を維持するには東アジアとの緊密な連携が重要。

このような背景を踏まえ、21世紀が日本社会にとって実り豊かになるには、長期的な見通しのもと、社会変化を想定し、柔軟な対応が可能な、新しい発想の国土政策を構築する必要がある。そこで本調査は、2030年における日本の未来像のシナリオを作成することにした。

長期的視野で実際の計画を立てる方法として、将来の想定に基づいて、これからの道筋を定める方法がある。理想的な未来像を想定し、そこから現在を振り返ってみる（バックキャスト）手法である。この手法で、理想とする未来像と現状の間のギャップを正確に把握し、未来像の実現に向けてなすべきことを明確にできる。このバックキャストのベースになるのが、未

来像のシナリオだ。将来の社会像を具体的に検討することで、多くの人々が目標を共有し、それに至る実現性の高い計画を立てることも可能になる。

今回の調査では、2030年の日本社会が持続可能であることを大前提に、日本社会の未来像について4つの異なるシナリオを考え、外部専門家はそのシナリオのロジックを検討・補強し、2030年のあるべき未来像として具体的に描いた。

これが国交省の説明の概要である。「バックキャスト」などということばを初めて知ったが、受験生がやっていることとそんなにかわらない。受験生は1、2年後に目標とする学校に入学しているという「理想とする未来像を想定し」「理想とする未来像と現状の間のギャップを正確に把握し、未来像の実現に向けてなすべきことを明確に」する。つまり志望校に合格するのに必要なことがらをはっきりさせ、そのことがらを日々こなしていくことで「理想とする未来像」を実現しようとする。受験勉強が得意だった人びとが、その得意手法を役人になってからもつづけているだけのことのよう思う。

「4つの異なるシナリオを考え」とあるが、その4つとは「A：環境・農業を重視するシナリオ」「B：東アジア経済発展シナリオ」「C：多様性社会シナリオ」「D：地域コミュニティ活性化シナリオ」のようである。

ほかの3つはひとまずおいておくとして、「多様性社会シナリオ」（以下、「シナリオ」と略す）でどんな日本の未来像を描いているのだろうか。以下は「シナリオ」の全文である（<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/futurevision/c.html>）。

C：多様性社会シナリオ

全体のイメージ

2030年の日本の社会におけるキーワードは、多様性（ダイバーシティ）。人種・性別・年齢などに一切関係なく、すべての人々が自分の能力を活かしていきいきと働ける社会が実現している。外国人にとっても魅力的に変わった日本の社会には、アジアを中心に海外からの留学生、就労者が増え、人口の20%は外国人が占めるまでになっている。こうした多様性にあふれる社会の中で、日本人は自分たちの文化や独自性を再発見し、自らのアイデンティティを明確にし、魅力ある国を再び作ることに成功している。またこの社会は、一人ひとりの生活を重視する社会でもあり、労働スタイルが効率的になることで、8時間勤務が実現し、自然のリズムにしたがいがい、自然の流れと共生する、資源循環型社会でもある。多様な価値観の人々がお互いに相手の文化や考えを尊重する中で、世界の平和、貧困の撲滅にむかって貢献する日本の能力も醸成されている。

側面ごとにみた内容

多様性

- ・多様性を大切にしたい世界一の環境先進国を目指す（ダイバーシティーがキーワード）
- ・外国人も含めてすべての多様な人々がいきいきと働いていく社会
- ・外国人に対して、無差別にオープンではなく、日本に永住希望する人が増えるような社会、文化的障壁の低い社会
- ・国境はほとんど意味をなくしている
- ・外国人からも魅力的な観光地になる

ライフスタイル

- ・日本人男性には、8時間労働を義務付ける（残業をしてはいけない）
- ・寝たきり老人を予防する社会へ
- ・分散型多層型のネットワーク社会
- ・地球社会全体で貧困とテロをなくすために、東アジアと日本がその一翼を担う
- ・意欲と能力のある人には男女等差別なくチャンスが与えられる社会へ

環境

- ・自然との共生 かつての江戸時代の資源循環型社会
- ・社会の仕組みとして、所有でなく機能を利用するという考え方

目標

- ・日本はリーダーシップを発揮し、世界に貢献する
- ・日本のアイデンティティを明確にし、魅力ある国を実現する

課題

三本柱

- ・世界の平和、貧困の撲滅にむかって貢献する
- ・日本のアイデンティティを明確にし、魅力のある国にする
- ・外国人が20パーセントいる社会にする
- ・人種・性別・年齢に関係なくそれぞれの人々がいきいきと働ける社会にする

これを達成するための課題は以下の通り。

- ・国民全員が多様性を知る
- ・価値観を転換する

- 仕事人間からライフワークバランスの取れた人間へ
- 官から民へ
- 日本人社会から多民族社会
- 地方分権化
- ・心のグローバル化を進める
- ・新しい社会システムを作る

以上が「シナリオ」として国交省のHPに公表されているものの全文である。多様性社会が実現できたら、不幸な人はいなくなり、社会問題も一掃されているかのうようだ。“2030年までにこういう社会を日本で実現していたらいいなあ、日本国民のみなさん、いっしょにこの未来像に向けて、社会をよくしていきましょう”ということなのだろう。ちなみに、「三本柱」のところには、なぜか四項目が列挙されている。また、数字が半角だったり全角だったり、「20%」だったり「20パーセント」だったりしており、ちゃんと校正したのかどうか、怪しい気がする。

校正がおざなりなのは「シナリオ」実現への意欲の程度を表しているように感じるが、そのことについてはひとまずおくとして、それ以外にもいくつかひっかかりを感じる。違和感がある。どこに違和感を覚えるのか。

「シナリオ」はだれに向かって呼びかけているのか

「シナリオ」の冒頭は「2030年の日本の社会におけるキーワードは、多様性（ダイバーシティ）。人種・性別・年齢などに一切関係なく、すべての人々が自分の能力を活かしていきいきと働ける社会が実現している」となっている。ここでは多様性は「人種・性別・年齢などに一切関係なく」という部分と関係していそう。つまり、「人種・性別・年齢など」が影響しているために、「すべての人々が自分の能力を活かしていきいきと働ける社会が実現」していないという現状認識があり、その認識を前提として「シナリオ」は現状を変えていこうと呼びかけているわけである。

では「シナリオ」はだれに呼びかけているのだろうか。その答えを探すために、「シナリオ」がどういうことを暗黙のうちに想定しているのかをあらためて確認しておこう。

「人種・性別・年齢など」が影響しているために「自分の能力を活かしていきいきと」働こうとしているのに働けていない人びとがいる。どうしてこのような現状があるのか。それは「人種・性別・年齢など」に対してなにか偏見や固定観念のようなものをもっている人びとがいるからだ。そういった人びとは偏見・固定観念にもとづいて、特定の「人種・性別・年齢など」に属するとされる人びとが「自分の能力を活かしていきいきと」働くことを妨害している。そのために、特定の「人種・性別・年齢など」の人びとも「自分の能力を活かしていきいきと」働きたいのに働けない。そのように「シナリオ」は想定しているのではないか。

この解釈が妥当であるとすれば、「シナリオ」が呼びかけようとしている相手・対象とは、特定の「人種・性別・年齢など」に属しているために「自分の能力を活かしていきいきと」働きたいのに働けない人がいるという現状を作りだすことに影響力がある（と推測される）人びと、この現状に問題があるとは考えていない（と推測される）人びと、ということになるだろう。

もうすこし具体的にいうと、おそらくそれは、日本人の男性で、企業や組織で管理職の地位に就いているような年齢の人びとだろう。

「人種・性別・年齢などに一切関係なく、すべての人々が自分の能力を活かしていきいきと働ける社会」を実現しようと「シナリオ」が呼びかけるのは、人を判断したり評価したりするときに、相手が日本人であるかどうか、男性であるかどうか、どのような年齢なのかに強い関心をもつ人びとがいて、その人びとが就労や雇用のあり方に強力な影響をおよぼしていると「シナリオ」が想定しているからである。

「シナリオ」の文中には、「外国人にとっても魅力的に変わった日本の社会には、アジアを中心に海外からの留学生、就労者が増え、人口の20%は外国人が占めるまでになっている」などと、再三にわたって外国人の受け入れに関係する文言がでてくる。これは「シナリオ」が、相手は日本人なのか外国人なのかということにこだわるだけでなく、その違いに価値の優劣をつける人があると想定しているからである。この場合、価値の優劣とは「日本人＞外国人」という優劣である。

このような価値の優劣のつけ方に問題を感じない人びとは、外国人が日本に来ることに反対するだろう。高齢者介護など慢性的に人手不足に陥っている危機的状況を外国人労働者受け入れによって緩和しようとする政策に反対するだろう。日本に住んで日本の企業で働きたいと希望する外国人に部屋を貸さないし、雇用もしないだろう。近所に住む外国人や同じ職場にいる外国人に対して心ない言動をするだろう。ほんとうにそんなことをするかどうかわからないし、どれぐらいの日本人がそのようなことをするかもわからないが、「シナリオ」は「きっとするだろう」と想定している（恐れている？）。

「シナリオ」からすれば、そう想定する理由はいくらでもある。ヘイトスピーチ、外国人であることを理由にした就職差別・結婚差別、学校や地域でのいじめ・嫌がらせなどの例は、あげようと思えばいくらでもあげられる。最近増えた外国人観光客とのトラブルなども「シナリオ」の想定を支える根拠となりうる。

「性別」についても同じように考えることができそうだ。「シナリオ」の「側面ごとにみた内容」の「ライフスタイル」には「意欲と能力のある人には男女等差別なくチャンスが与えられる社会へ」という文言がある。“そういう社会を実現しましょう”と「シナリオ」は呼びかけているのだが、ではだれに呼びかけているのかといえば、やはり男性に向けてだろう。

現在の日本社会は男性中心である。「男性＞女性」という価値基準が大勢を占め、女性の進学や就労に対して差別的である。「シナリオ」はそう想定しているだろう。根拠はこの場合もたく

さんある。ある医科大学は女性受験者の得点を一律減点していた。

女性であるというだけで、本人が望まない不利益なあつかいをする社会。その中心を占める男性。とりわけ、組織のなかで、なにかを決定する権限が与えられている男性。管理職にある男性。そういった男性に向けて、「男女等差別なくチャンスが与えられる社会」へと変わっていきましょう、と「シナリオ」は呼びかけているのだろう。

「年齢」については話はやや複雑になるかもしれない。「年上＞年下」という場合もあれば、「より若い＞より若くない」という場合もあるからである。日本に特有の年功序列や先輩後輩関係のほか、“いまの若いやつは……”とか“「ゆとり世代」の人たちは……”とかの決めつけとも思える発言がある。これは「年上＞年下」という優劣の価値基準を信じている人びとの表現だろう。その一方で、「エイジズム」ということばが示そうとしているように、とにかく若い方がいい、年齢を重ねることはよくないことのように考える傾向もある。「より若い＞より若くない」と信じて、アンチエイジングに励む人は多い。「シナリオ」が「年齢」に関してどのような想定をしているのか、今のところこれ以上の想像をめぐらすのは困難だ。そういうこともあって、しばらくは「年齢」より「人種」「性別」の方に焦点をあてる。

いずれにしても、日本社会で多数派（マジョリティ）の側にいて、権限・権力の中核を占める（と想定される）人びとに向けて、具体的には日本の企業・組織に所属する管理職に就いていそうな年代の日本人男性に向けて、「シナリオ」はメッセージを発信しているということになりそうだ。

認めてあげる側／認めてもらう側

もし以上のように推測できるとしたら、「シナリオ」の呼びかけには、さらにある前提が潜んでいることになる。一方には認めてあげる側、受け入れてあげる側、考え方を必要のある側がいて、他方には認めてもらう側、受け入れてもらう側、考え方を必要とする側がいない側がいるというふうに、「認めてあげる側／認めてもらう側」のふたつの立場があるという前提だ。

「人種」に関していうと、「認めてあげる側＝日本国民／認めてもらう側＝外国人」、「性別」に関しては「認めてあげる側＝男性／認めてもらう側＝女性」ということだ。

そのうえで、前者の「認めてあげる側」にいる（と想定される）人びとに向かって、“あなたたち「認めてあげる側」の人びとは、まだちゃんと認めてあげてません。不十分です。多様性がわかっていません。多様性を理解し、考え方を改めて、あなたたちとは違う人びとも認めてあげてください”と呼びかけているのだろう。「シナリオ」にも「課題」として「国民全員が多様性を知る」という項目があった。

外国人や女性を認めていない（と想定されている）側にも、それなりの言い分はあるだろう。“こっちには、組織を回していく責任があるんだ”とか“競争や生き残りに勝てない”とかの言

い分が推測できる。さきにも触れた医科大学が女性受験者の得点を一律減点していた理由として、“病院での勤務は激務であり、それに耐えうるのは男性だから”というようなことを言い分として述べていたのも、その一例だろう。

ただし「シナリオ」は、「認めてあげる側」にいる（と想定されている）人びとに向かって“今すぐ変わらないといけないとはいいません。2030年までには変わっていくように努力しませんか”と説得している感じがする。というのも「人口の20%は外国人が占める」「外国人に対して、無差別にオープンではなく」「外国人が20パーセントいる社会にする」というふうに、日本国内にいる外国人の数量を制限するかのような文言が何度も使われているからだ。これらの文言からは“日本を外国人ばかりの国にしようというわけではありませんよ。「数量制限」は設けません。一気に増やすわけでもありません。10数年かけてちょっとずつ増やしていけばいいんです。2030年頃までには20%ぐらいいてもらえたらいいんです。だから日本に「永住希望する」外国人が増えるように努力しませんか”というふうに説得して、外国人受け入れを進めようとしているふうにも読める。

なぜ「20%」なのか。そういえばだれかが“外国人だか移民だかの割合が人口の10%を超えるといろいろ問題が起きがちだ”というようなことを述べているのを聞いた記憶がある。それを参考にすると「20%」はかなり多いことになる。いずれにしても「20%」に目標数値を設定した理由は不明だが、このような数字を設定することからは、多様性をコントロールしようとしている感じがする。コントロールされた多様性、制限された多様性というイメージを抱く。

「20%」を設定した側からすれば、「制限」ではなくて「数値目標」のつもりなのかもしれない。“せめて、あなたの企業・組織でも20%ぐらいは外国人を採用しましょう”というふうに具体的な数値を目標として設定し、それに向けて企業や組織に努力させる、というわけである。障害者については、すでにそういう数値が「義務」として法的に設定されている。ただし、中央官庁をはじめ民間企業も「義務」を果たしているかのようにごまかしていたことが発覚した。

また気になるのは、「認めてあげる側／認めてもらう側」というふうにきれいにわけることができるのかどうか、という点である。たとえば、企業の管理職に就いている日本人で、一応性別は男性だが、本人の性自認は女性といった場合である。いわゆるトランスジェンダーと呼ばれるこの人の場合、「認めてあげる側／認めてもらう側」の両者にまたがっている。こういった境界をまたぐ人びとの存在を意識しておきたい。

ただし、しばらくはコントロールされた多様性、制限された多様性のテーマに戻って考えていくことにする。

「シナリオ」にあった「男女等差別なくチャンスが与えられる社会へ」という文言の頭には「意欲と能力のある人には」という但し書きがついている。まるで“意欲と能力のない人については、男女等差別がありますよ”といているように読みとれる。

“ある条件を満たした人たちについては、その人の「人種」や「性別」がなんであろうと尊重

します。でも、条件を満たしていない人については、そのかぎりではありません” という暗黙の価値基準が「シナリオ」には潜んでいるのではないだろうか。

2. 『ズートピア』に寄り道する

ズートピアの世界

ここで「寄り道」してみよう。しばらく映画『ズートピア』からいろいろ読みとってみたい。『ズートピア』も多様性をテーマにしており、しかも意欲と能力の問題にも関連しているような気がするからだ。

『ズートピア』は、メスのうさぎジュディ・ホップスが主人公で、子どものころから「草食動物で初めての警官になる」という夢を周囲に話しては、周囲から「やめておけ」とか「なれるわけがない」とか「違う方向で生きがいを見つけた方がいい」とかいわれるけれど、夢をあきらめずに追いかけ実現した、という筋書きだ。

おもしろいし、よくできている映画だと思う。この機会にDVDを何度か観てみた。映画館で観たときには気づかなかったが、国交省の「多様性社会シナリオ」との共通点が多いことにも気づけた。「多様性が大切。それと同時に強い意欲と高い能力も大切」。これが『ズートピア』の中心的価値基準のようだ。

ひとまず『ズートピア』の概要をまとめる（本作に関する以下の議論はDVDの日本語吹き替えを主として参照しているが、適宜オリジナルの英語のセリフ等も参照している）。

「にんじんまつり」の演^だしもので、9歳のうさぎのジュディたちがお芝居をしているシーンから映画ははじまる。ナレーター兼演者のジュディがいう。「何千年も昔、肉食動物が草食動物を襲っていた。でも、そんな時代は過ぎ去った。ここから340キロのところにあるズートピアでは、肉食動物と草食動物は仲良く暮らし、「だれでも、なんにでもなれる」ようになった」。そして観客たちのまえで宣言する。「私は警察官になる」と。

両親の反対や、近所の悪ガキからの嫌がらせにもかかわらず、「世界をより良くしたい」ジュディはズートピア警察学校に入学。「ウサギが警察官になれるわけがない」と思いこんでいる教官も、きびしいことばをくり返しジュディに投げつけ、あきらめさせようとする。だがジュディはへこたれずに警察学校を首席で卒業。「草食動物初の警察官」としてズートピアのシティセンター第一分署へ配属される。ジュディの夢は叶ったかのようだ。

しかし、ズートピアはジュディが思い描いていたような理想郷ではなかった。人口では草食動物が9割を占めるのに、ズートピアの中核を担うのは肉食動物。草食動物は肉食動物を恐れている。また肉食動物と草食動物とのあいだには偏見や決めつけがあった。「ウサギはマヌケ」で「キツネはずる賢い」など。

偶然知り合いになった詐欺師のキツネ、ニック・ワイルドの協力を得て、「肉食動物がとつぜ

ん凶暴化して行方不明になる事件」を解決。ジュディは一躍ズートピアのヒーローとなる。しかし記者会見で「生物学的要素が関係している」と発言したことが波紋を広げ、肉食動物追放運動が起きる。この発言で、ニックもジュディのもとを去る。

肉食動物と草食動物の対立が激化するなか、平和集会を開いたポップスターのガゼルはテレビポーターのインタビューにこう答える。「ズートピアは特別なの。種の多様性に満ちている街、それぞれの違いを認めあい、互いを受け入れている、すばらしい街なんだから。肉食動物が凶暴になる原因はわからないけど、だからって肉食動物を凶暴と決めつけるのは無責任だわ。どうか私のズートピアを返して！」

肉食動物・草食動物が分断し、両者が互いにののしりあっている状況をみて「世界をより良くしたかったのに、逆に壊してしまった」と自分を責めるジュディは警察を辞めて、田舎に戻り、実家でにんじん農家をやっている両親と働く。しかし、事件の真犯人が「肉食動物に見下されてきた」と復讐に燃えていたヒツジの新市長だったことをジュディが突きとめる。「キツネ初の警官」となったニックとともに、あらためて警察官として働きはじめるジュディ。

事件解決の記念式典でのジュディのスピーチ。「私は子どものころ、ズートピアを理想の地と思ってた。みんなが仲良く暮らし、だれもがなんにでもなれる。でも現実の世界はもっと複雑。標語通りにはいきません。現実はとてもきびしい。だれにも限界はあるし、過ちも犯す。でも、だからこそ共感し合えるんです。たがいを理解しようとすれば、もっとみんなが輝けます。でも努力しないと。あなたはどんな動物でしょう。最大のゾウに、初のキツネ警察官。みなさんに伝えたい。努力を。より良い世界のために。ここをみつめて。世の中を変えるには、まずあなたから。そして私から。すべての動物から、です」。

エンディングはライブ会場かクラブのようなシーン。多様性という理念の象徴的存在であるガゼルの歌にあわせて、さまざまな動物が入り乱れて踊る。

ガゼルがエンディングで歌う「Try Everything」は、劇中歌として、ジュディが田舎からズートピアへ向かう途中にも流れていた。歌詞の意味は、字幕によると、こんな感じだ。

「今日また一つ闘いに負けた。弱い私。でもやり直すわ。何度倒れても打ちのめされても起きあがり、前をみる。鳥は空を飛ぶ、助走をくり返し。努力もせずなにかを得る者はいない。私はあきらめない。限界がきても、やり直すだけ。すべての可能性を試したい。倒れてもチャレンジする。私はあきらめない。限界がきても、やり直すだけ。すべての可能性を試したい。私はあきらめない。絶対に。きつとするだろう、新しい失敗を。きつとくり返す、いろんなミスを。でも恐れない」。

意欲の強調

『ズートピア』が多様性の大切さを主張しているのは明らかだ。ガゼルの発言で、「ズートピアは種の多様性に満ちた街」と字幕があった部分は、オリジナル音声では「diverse city」だっ

た。diverseの名詞形がdiversityだ。そこで「diverse city」を「多様性に満ちた街」と訳したのだろう。そのガゼルの歌に合わせて多様な動物が踊るエンディングは「多様性に満ちた街」のイメージにぴったりだ。

また、多様性社会が現在はまだ実現できていないという現状認識も「シナリオ」と共通している。ジュディのスピーチをもう一度みしてみる。

「私は子どものころ、ズートピアを理想の地と思ってた。みんなが仲良く暮らし、だれもがなんにでもなれる。でも現実の世界はもっと複雑。標語通りにはいきません。現実はとてもきびしい。だれにも限界はあるし、過ちも犯す。」

このスピーチでジュディがいつている「現実」とは、どういうことなのだろう。「現実はとてもきびしい」とは、どういうことなのか。

まず、みんなが仲良く暮らしているわけではないという「現実」。だれもがなんにでもなれるわけではないという「現実」。おたがいに偏見をもって相手を勝手に決めつけたりする「現実」。だれにも限界があるという「現実」。だれでも過ちや失敗を犯すという「現実」。

こういった「現実」とジュディは闘い、ひとまず勝った、ということになるのだろう。勝てたのはなぜか。ジュディは小さいころから、「絶対にあきらめない」を信条としていたから。映画はそう描いている。

そういえば相棒のニックは、一度この「現実」との闘いに敗けたという設定だった。捜査がうまくいかないジュディが落ちこんでいるとき、ニックは「傷ついたら負けだ」と慰める。そして問わず語りに小さいころの経験をジュディに話しだす。ニックが8歳か9歳のころ、ジュニア・レンジャー・チームへの入会を肉食動物として初めて許可されたという。意気揚々と入会式へでかけていったニックに対して、最初は歓迎の態度をみせていた子どもの草食動物たちは、ニックにいう。「ずる賢いキツネを入会させると思うか？」ニックは草食動物たちに押さえつけられ、無理やり口輪をつけられ笑いのものにされる。この経験をして以来、ニックは、なにがあっても傷つかないこと、世界がキツネはずるいと決めつけるなら、なにをしても仕方がないとあきらめることにしたという。

つまりジュディもニックも「オマエにはそんな可能性はない」と世間が決めつけていたことがらに挑戦したわけだ。片や「草食動物初の警官」になろうとし、片や「肉食動物初のジュニア・レンジャー」になろうと。だがニックは闘いに敗れて、夢をあきらめて、詐欺師となった。それに対してジュディは一時的に敗北するが、「絶対にあきらめない」ことで最終的には勝利する。それと同時にニックを「キツネ初の警官」へと導く。

絶対あきらめないジュディ、強い意欲をもつジュディが、世間の偏見と闘い、「ウサギにも警官がつとまること」を世間に証明してみせたわけだ。

ガゼルが歌う「Try Everything」は、この強い意欲を強調する。

何度倒れても打ちのめされても、くり返し起き上がる。あきらめない。限界が来ても、やり直

す。すべての可能性を試す。倒れてもチャレンジする。新しい失敗をきつとするだろうし、いろんなミスをきつとくり返すだろうけど、それを恐れない。

とにかくジュディは、絶対あきらめないという強い意欲をもちつづけて、世間の偏見や決めつけと闘い勝利した。けれども「絶対あきらめない」と決意さえすれば実際にも絶対あきらめないのだろうか。決意してもあきらめることはいくらかもある。あきらめると、周囲から「精神力が弱い」とか「へたれ」とかいわれる。自分でも「なんて弱い自分なんだ」と思う。あきらめる／あきらめないは、個人の精神の問題としてあつかわれる。

意欲と他者

だけでも、そこに他者は関係しないのだろうか。『ズートピア』でも、ジュディは何度かあきらめかける。でも、またやり直そうとする。やり直そうとするきっかけをつくっているのはだれだろう。キツネだ。

一度目は、落ちこんでいるジュディを慰めようと、ニックが問わず語りをはじめたとき。二度目は、警察を辞めて実家でにんじん農家をやっているとき。このときジュディは幼なじみのキツネ、ギデオンの・グレイと再会する。弱いものいじめをする子どものころのギデオンは、映画の冒頭でジュディに「臆病なウサギが警官になれるわけがない」といって意地悪をしていた。それが今はジュディの両親といっしょに商売をしている。ジュディと再会したギデオンは、やはり問わず語りにこう話す。「あのころは、自信のなさが周囲への攻撃となって爆発してたんだ。許してくれ」。

このふたりのキツネが、自分の経験や感情を素直に話したり、過去を反省的に捉えなおしたりするのを聞いている最中に、突然ジュディにはひらめきが起これ、元気を回復し、事件解決への活動を再開する。また、キツネに対する偏見が自分にもあったことを自覚する。

こういうふうにはジュディがあきらめずに何度もやりなおすことができたのは、他者が素直に自分の感情を語ったり、反省したりする態度を示したからだ。意欲をもちつづけるのは、個人の精神の問題ばかりではない。他者がどのような反応や態度を示すかからも影響を受ける。

だから他者の反応・態度は意欲を削ぐ原因ともなる。「おまえに○○できるわけがない」「おまえが○○になれるはずがない」「おまえはマヌケな○○だ」と決めつけるのは他者だ。

いずれにしても、意欲をもちつづけるには、自分の精神力だけでなく、他者からどのような反応がやってくるかにも大いに関係している。

能力を示す

他者からどのような反応がやってくるか、事前に確実に知ることはできない。だからこそ「他者」なのだ。しかし他者の反応をコントロールできないだろうか。多くの人は自分に対する他者の反応をコントロールできると想定し、じっさいにコントロールしようとしているのではない

か。すくなくとも『ズートピア』をみるかぎり、それはできると想定されている。では、どうやってコントロールするのか。能力を示すことによってだ。

ジュディが「ウサギに警官がつとまるわけがない」という他者の決めつけや偏見を変化させられたのは、警察学校を主席で卒業したとか、難事件を解決したという事実があるからだ。決めつけとは矛盾する事実をみせつけ、偏見の根拠を崩す結果をだしたからだ。そういえば、ニックも物語の進行とともに「ずる賢いキツネ」から「抜け目がないキツネ」というふうに評価が変わっていった。ジュディが気づかないことを「抜け目なく」指摘したりすることで捜査に協力し、それが結果をだすにつれて、「私利私欲や不正なことに使う能力」の持ち主から「社会に有用な能力」の持ち主へと評価あるいは解釈が変わったわけだ。能力があるかないか、どの程度能力があるかだけでなく、それがどんな能力なのか、それはどのように解釈されるのかによって、他者の反応をどれくらいコントロールできるかも変わってくる。他者がプラスに評価するようななにかを結果として提示することが大切になってくる、とも言い換えられそうだ。

とはいえ、ある見方と矛盾する事実を突きつけられたら「ああ、事実無根の偏見を私はもっていたんだ」というふうに、自分の決めつけを自覚し、見方を改める人ばかりではない。むしろ、どんな事実をみせつけられても決めつけを手放そうとしないことの方が多い感じがする。そのへんは社会心理学に研究の蓄積がある。有名なのは「認知的不協和の理論」。授業では、時間に余裕があれば、そこに寄り道してもいいだろう。仮に余裕がなくて社会心理学の成果を紹介できなくても、人は決めつけをなかなか改めようとししない事例は紹介できそうだ。「なにか不正なことを裏でやったから結果がだせたんだ」とか「例外だ」とか「たまたまうまくいっただけ」とか「売名行為」とかなんとかいって、自分の決めつけを変える必要がないことを自分自身や他者に納得させようとする。ジュディのスピーチにあったように「現実はきびしい」わけだ。それにしても、世間では偏見や決めつけをがんばって守ろうとするのも「ブレない」といって評価するのだろうか。

3. 『グレイテスト・ショーマン』にも「寄り道」する

『グレイテスト・ショーマン』における「意欲」

多様性承認の条件としての能力と意欲に話を戻そう。そして素材については寄り道してみよう。日本では2018年に公開されたミュージカル映画『グレイテスト・ショーマン』だ。映画のなかに多様性ということばそのものはでてこないものの、本作は『ズートピア』と同じく多様性がひとつのテーマとなっている。また、意欲と能力というテーマとも大いに関連している。

まず、意欲の方からみていくと、主人公P.T.バーナムはジュディ同様、失敗をくり返しながらかも「あきらめない」人として描かれる。その点を映画のあらすじを紹介しながら明らかにしておこう。

舞台は19世紀半ばのアメリカ。バーナム少年は仕立屋の父親と二人暮らし。父親の仕事を手伝っているときに上流階級に属する少女チャリティと出会い、恋をする。チャリティの親はバーナム少年に「娘に近づくな」と二人を逢わせないようにし、チャリティは花嫁学校の寄宿舎に送られる（一度目の挫折）。

父親が亡くなり、住む場所も失ったバーナム少年は今でいうストリート・チャイルドのような境遇となり、食べ物を盗むなどしてなんとか生きていく。そのあいだもチャリティとの手紙のやりとりはつづいていた。アメリカは鉄道の時代に入り、バーナム少年も鉄道の仕事にありつくことができた。立派な青年になったバーナムはチャリティを実家へ迎えに行き、二人はニューヨークで生活をはじめ、二人の娘に恵まれる（一回目の成功）。しかしそのとき雇われていた会社が倒産（二度目の挫折）。

しかしバーナムはへこたれない。銀行をだまして一万ドル融資させることに成功。少年時代から空想すること、想像することの大切さを思っていたバーナムは「人びとはゾットするようなものが好き」と信じて、ヨーロッパのギロチン、ナポレオンの蠟人形、ゾウの剥製（のようなもの）などなど珍しい物ばかりを集めた博物館をオープンさせる（二回目の成功）。しかし客は来なかった（三度目の挫折）。

「博物館は死んだものばかり。生きているなにか奇抜なものがいい」という娘のひとことをきっかけに、バーナムは思いだす。ストリート・チャイルドだった時代、障害か病気のせいで顔が変形していた人にやさしくしてもらったことを。こうしてバーナムは「ユニークな人」を集め始める。「求む！ ユニークな人」というポスターを街中に貼りだした。現在だと「小人症」等とよばれる低身長22歳男性チャールズ。歌声は美しいのだが濃いひげが生えている女性レティ。黒人で空中ブランコが得意なアンとW.D.ウィラー兄妹。全身に入れ墨がある「入れ墨男」。全身が毛むくじらの「犬少年」。体重230キロの男性。ものすごく身長の高い男性。世間で「フリークス」と差別的に呼ばれてきた人たちが集まった。街のならず者たちから嫌がらせを受け、新聞では文芸評論家に叩かれるものの、「ユニークな人たち」によるショーは大成功を収める（三回目の成功）。博物館は「P.T.バーナムのサーカス」と名前も変えた。

チャリティの実家の近くに豪邸を購入し、バレエを習いたかった娘のキャロラインにはバレエ学校へ通わせる。だがバレエの発表会がおこなわれた劇場のホールで、バレエ学校の仲間（上流階級）に嫌がらせを受けたキャロラインは「バレエをやめる。はじめるのが遅かった。長年の訓練が要る。ニセモノのサーカスとは違う。バレエはホンモノなの」と父親に告げる。「偽物」「パテン師」「詐欺師」と呼ばれようとも労働者階級の客たちを楽しませるショーができればいいと考えていたバーナムはショックを受ける（四度目の挫折）。

バーナムに本物志向が芽生えはじめる。大衆だけでなく上流階級の客も劇場に呼びたくなったバーナムは上流階級出身の演劇プロデューサー、フィリップ・カーライルと出会い、サーカスの共同経営者へと誘う。フィリップのコネで「サーカス」のメンバー全員がイギリスへ行き、バツ

キンガム宮殿でエリザベス女王に会えることになり、女王にも気に入ってもらえた（四回目の成功）。宮殿には、スウェーデン人のオペラ歌手、ジュニー・リンドもきていた。「ヨーロッパでもっとも有名な歌手」であるリンドにニューヨークでの公演をもちかける。「なぜ私に？」と問いかけるリンドに、バーナムは「ぼくのショーは楽しくだます。一度は本物をみせたいから」と答える。

ニューヨークでのリンドの公演は大成功。上流階級の人間たちが会場に続々と押し寄せ、リンドの歌声に拍手大喝采（五回目の成功）。その様子を舞台のそででみているバーナムの表情は恍惚としている。その公演にきていたレティをはじめとする「ユニークな人たち」は、公演後、バーナムやリンドたちがいる社交場へと入ろうとするが、バーナムはそれを拒む。「ユニークな人たち」とバーナムとのあいだに溝ができた瞬間だが、バーナムはそのことに気づかず、リンドの全米公演ツアーを企画・実行しはじめ、溝はますます開くばかり。

成功をつづけている全米ツアーの途中、リンドのもとを離れて「サーカス」に戻ろうとするバーナムにリンドは「もし帰るなら、公演は中止にする」という。「そんなことになったら破産する」と答えるバーナムに「私も出し物だったのね。人を大切にしないなら破産も仕方ない」とリンドは返す。そのことばを本気にとらなかったバーナムがニューヨークに戻ると「サーカス」の建物が火事に。また、リンドはほんとうに公演を中止してしまって、バーナムは破産する（五度目の挫折）。しかもリンドとの関係をスキャンダルと新聞に報じられて、その記事を読んだ妻のチャリティも家をでていってしまう（六度目の挫折）。

打ちひしがれ、ひとりで酒を飲むバーナムのところへ、「ユニークな人たち」がやってくる。「破産したから給料は払えない」と力なくことばを発するバーナムにむかって、彼らは語る。「母親にすら疎まれ、存在も隠されてた。救ったのは、あなた。なのに見捨てないで。ペテン師で、目的は金儲けだったかも。でもほんとうの“家族”をくれた。サーカスは“家”だった」。このことばで、だれのために、なんのために生きてきたのかを思いだしたバーナムはチャリティに謝罪し、また四人で暮らせるようになる。「サーカス」も場所を変えて復活する（六回目の成功）。

なにを「成功」、なにを「挫折」とみるかによって変わってくるだろうが、以上のように主人公バーナムはまさしく「七転び八起き」の人として描かれている。何度挫折しても夢を「あきらめない」バーナム。『ズートピア』のジュディとの共通点は明らかである。

ちなみにP.T.バーナムは19世紀半ばのアメリカに実在した人物である。実在のおそらくバーナムも「七転び八起き」の人だったのだろう。しかし、史実と映画の内容とは異なるはずである。実在のバーナムの属性や特徴、エピソードなどのうち、映画で取りあげられたものはどれか、どのような脚色が施されているか、などについて調べる必要がある。

けれども、ここで問題なのは、2017～2018年という年に『グレイテスト・ショーマン』という映画がアメリカや日本で公開されたことである。本作のプロデューサーや監督、脚本家はまさに

この時代を生きている人びとである。彼らは実在したバーナムがどのように生きたのかを、CG等、現代の映像技術を使って再現・リメイクし、映画に仕立て上げ、多くの観客を呼び寄せようとする。自覚しているかどうかは不明だが、プロデューサーたちは、この時代の価値基準にもとづいて、実在したバーナムの人生で起きたさまざまなできごとについて、ある部分を強調し、別の部分は軽く触れるだけというように取捨選択をしている。そういうふうにしてできあがった映画の内容や描き方からは、現代の価値基準を読みとることができるはずである。

変更不可能なものを理由とする差別

「あきらめない」人P.T.バーナムは、「普通」とは違う多様で「ユニークな人たち」に居場所を作った。「隠れていろ」と親にいわれ、自分は姿を他者たちの目に触れさせてはいけないような存在なんだと自分でも信じてしまった「ユニークな人たち」。彼らはしかし一方で、他者たちと同じように気楽に世間にでていきたい、「普通」とは違うその違いを他者に認められ受け入れられたいとも願っていた。

「隠れていた方がいい／隠れずに外へでたい」という矛盾する気持ちに日々葛藤する「ユニークな人たち」を説得してサーカスの舞台にあげることに成功したバーナムは“ことばの人”でもある。すくなくとも映画では、ことば巧みに相手を説得していく。“ものごととはすべて解釈次第”という感じで、ことば巧みにショーの宣伝をし、観客を楽しませる。

彼らの「違い」はほとんどが生まれつきのもの、生得的な属性であった。たとえば、身体的特徴（巨人、小人、全身毛むくじゃら、女性だがヒゲが濃い等）、人種（黒人等）、自分が生まれ落ちた家庭の階級（下層階級、労働者階級）のせいで、隠れて生きることになっていた。どれも本人の力ではどうにも変更しようのない属性ばかりである。例外もある。たとえば全身に入れ墨を彫っている「入れ墨男」である。入れ墨は自分で選んで自分の身体に彫るものだからである。

しかし、これも考えようによっては本人の力では変えようのないものとも解釈できる。ある年齢のときに彼は全身に入れ墨を彫った。当時の彼には彫る理由があったのだろう。しかし人間は考え方が変わる。予想していなかったできごとや出会いをきっかけに、自分でも驚くほど考え方や生き方が変わることがある。変わる可能性を秘めていることこそ生きている証拠である。死んだ人は死んでいる以外に可能性はない。だが、身体に彫り入れた入れ墨は消えずに身体の上に痕跡を残したままである。本人は生まれ変わったかのようにになっている。けれども、過去に身体に残した痕跡は変わらない。そして他者はこの痕跡の方に目を向ける。この痕跡から入れ墨男の本質を読みとる。入れ墨を彫ったときからずっとこれまで入れ墨男の本質は変わっていない、継続している、持続していると推測する。入れ墨男は自分が生まれ変わったことを実感している。入れ墨男が生まれ変わったかのように感じとってくれる他者もゼロではないかもしれない。過去とは異なる現在の入れ墨男をみてる他者がいるかもしれない。けれども大多数の他者は入れ墨男の過去、全身に入れ墨を彫ったという過去の事実に関心を向け、過去の痕跡から勝手に当人

の本質を読みとり、「普通の人ならもたないような考え方をもつ人」と解釈される。入れ墨男にとって入れ墨という痕跡はもう自分の力では変更不可能なものなのである。

変更不可能なものの変更可能性

このように身体的特徴・人種・階級などの変更不可能な属性を理由に差別的なことばと視線をなげつけられてきた「ユニークな人たち」。彼らにはしかし変更可能なことがらがすくなくともひとつあった。変更不可能な属性の意味あい、つまり解釈である。これは変更可能だ。そしてその変更可能性を実現するのがことばであった。

『グレイテスト・ショーマン』の場合は、ミュージカル映画だから当然かもしれないが、歌である。歌のことば（歌詞）あるいは歌うことそのものによって、変更不可能な属性の意味あい・解釈を変更しようとする。その典型が「This is Me」という劇中歌である。

レティがメインヴォーカルで歌い上げるこの歌の内容は、DVDの字幕によれば、おおよそつぎのとおりである。「私は暗闇を知っている。いわれた、“隠れてろ、おまえなどみたくない” 身体の傷は恥だと知った。いわれた、“消えろ、だれもおまえなど愛さない” でも、こころの誇りは失わない。居場所はきっとあるはず、輝く私たちのために。ことばの刃で傷つけるなら、洪水を起こして溺れさせる。勇気がある、傷もある、ありのままにいる、これが私。気をつけろ、私がゆく。自分で叩くドラムが伴奏。みられても怖くない、謝る必要もない、これが私。こころに弾を受けつづけた、でも撃ち返す、今日は恥も跳ね返す。バリケードを破り、太陽に手を伸ばそう。私たちは戦士。闘うために姿を変えた。私にも愛される資格がある。値しないものなどなにひとつない」。

「身体の傷」という表現はここでいう変更不可能な属性（生得的特性）を指している。その属性に対して他者たちが投げつけた差別的なことばや視線によってできた「こころの傷」をも意味しているだろう。そのような他者たちのことばや視線に対してレティたちは立ち向かう。

「私たちのことを恥ずべき存在であるかのようにあつかっても、私たちは誇りを失わない。ことばで傷つけるなら、仕返ししてやる。愛してもらうのに条件など要らない。条件付きの愛など要らない。傷はあるが勇気もある。これまで傷を恥ずべきものと考えて隠してきたが、今日からはもう隠さない。隠す必要などない。これがありのままの私だ。いったい私たちとあなたたちとでなにがそんなに違うのか。傷があるかないかの違いはあっても、あなたたちと同じように私たちにはこころもあれば価値もある。それなのにまだ私たちを嘲笑するなら、私たちは闘う。私たちは戦士である。ただし暴力的な手段は使わない。自分の姿をさらし、歌い、踊ることによって闘う」。これが「This is Me」の主旨なのではないかと私は解釈している。

そして映画では観客たちは「This is Me」を歌い踊る「ユニークな人たち」に拍手喝采を送る。自分たちのショーへ贈られる笑顔や賛辞をとおしてレティたちは認められたと感じる。感動的な歌（ことば）とダンスをみせる（身を視線にさらす）ことによって「違い」や「多様性」が

受け入れられる人びとの姿、変更不可能なものの変更を可能にした人びとの姿を映画は表現する。

そういう意味では「ユニークな人たち」の多様性も無条件に認められているわけではない。感動的な歌やダンスをショーとしてみせることができる。ことばと身体を巧みに操る能力をもっているからこそ認められる。そういうふうにも読みとれる。そのような読みとりが可能なら、『ズートピア』同様、『グレイテスト・ショーマン』における多様性も「制限された多様性」ということになると思う。だからといってこの映画の価値が下がるわけではない。

4. 『ズートピア』に戻る

多様であることと同じであること

『ズートピア』に戻ろう。ジュディのスピーチでもうひとつおもしろいのは、「現実はとてもきびしい。だれにも限界はあるし、過ちも犯す。でも、だからこそ共感し合えるんです。たがいを理解しようとすれば、もっとみんなが輝けます」の部分だ。だれでも限界はあるし、だれでもミスをする。だからこそ、だれでも共感しあえる可能性がある。ここでジュディが問題にしているのは、多様性ではなく共通性だ。

多様性を大切にするには、じつは共通性をどう設定するかが重要だ、ということにこの論理は気づかせてくれる。

まったくなんの共通性がないもの同士について、両者の違いを認めるなどということとはできない。同じ人間だけど、考え方や習慣、信じていることや価値観は異なる。同じ地球上の同じ時代に生きている人間と呼ばれる同じ生き物でも、そのあり方はいろいろある。その違いを認めよう、違いを尊重しよう。多様性を唱える立場はこの論理に従っているはずである。問題は、どこに共通性を設定するかだ。

ジュディは、限界があることとミスをすることに共通性を設定している。共通性のハードルを下げているわけだ。限界を感じたこともミスを犯した経験もだれでも思い出すことができる。「だれにも成功、達成、実現の経験はあるはず。だから、共感しあえる」とはなかなかいいにくい。成功や達成の経験をしたことがある人はもちろんいる。でも全員ではない。なにかに成功したこと、なにかを達成したことを共通性に設定するのは、共通性のハードルを上げることに等しい。それでは「同じ」のカテゴリーに入る人は限定されてしまう。カテゴリーからこぼれ落ちる人の方が多いぐらいだ。これでは多様性の推進に対して逆行することになる。

けれども、じゃあ、限界を感じたり過ちを犯したり失敗したりすることを共通性にした場合、ほんとうにそこからこぼれ落ちる人はいないのだろうか。限界を感じるには、おそらく「なにかにチャレンジした。→達成できなかった。→限界を感じる。」という流れが想定される。過ちを犯し失敗するにも「なにかを実現しようとした。→やり方が間違っていた。→過ちを犯す、失敗

する。」というプロセスがあるだろう。

ということは、「なにかにチャレンジした人、なにかを実現させようとした人は、みんな自分の限界にぶち当たり、過ちを犯したりしたことがあるはずで、その点ではみんな「同じ」だ。ただし、なにかにチャレンジしたか、なにかを実現させたいかについては「人それぞれ」だし、そのほかにもお互いにいろんな「違い」がある。けれども、その「違い」を認めて尊重し合おう、だって限界を思い知らされ過ちを犯した経験はみんな「同じ」だから」という論理になっているわけだ。

このロジックでいくと、なにかにもチャレンジしない人、なんにも実現させようとしない人とは共通性を見出せないことになる。だからこそ、『ズートピア』はジュディのスピーチを通じて、またガゼルの歌を通じて、チャレンジしよう、チャレンジしつづけよう、可能性を試してみよう、あきらめるな、失敗してもやり直せばいい、「Try Everything」だ！と訴えているわけだ。

『ズートピア』が設定しようとする共通性のハードルは低い。しかし、ハードルがないわけではない。無条件で共通性が認められるわけではない。だけど共通性を基礎におかないと多様性を認めあうことは困難だ。多様性の実現には、なんらかの共通性という条件が必須ということになる。

「みんな」とはだれのことか

もうひとつ『ズートピア』について考えておきたことがある。これもずっとひっかかっているテーマだ。

『ズートピア』は多様な動物がお互いに違いを認めあい尊重しあう社会を目指そうと唱える。みんなにはそれぞれ夢があって、夢の実現に向かってチャレンジしている。チャレンジした結果、自分の限界を思い知らされたり、過ちを犯したりして、挫折したこともあるはずだ。挫折の経験はみんなに共通しているはずだ。だから、みんな「違う」けれど、みんな「同じ」でもある。この「同じ」の部分をもとにして、お互いに共感し理解しあえるはずだ。これが『ズートピア』のロジックだった。

ひっかかるのは、ここで呼びかけの対象となっている「みんな」だ。「みんな」とは、だれのことなのだろうか。それはこの世に存在するものたち「みんな」のことなのだろう。

ただし、『ズートピア』にはあらゆる動物や生き物が登場するわけではない。たとえば、鳥は登場しない。ハ虫類や両生類も登場しない。魚もでてこない。哺乳類だけの世界だ。

『ズートピア』は動物を擬人化している。ということは、哺乳類だけの世界とは、人間だけの世界のようにも解釈できる。アジア系やアフリカ系、ヨーロッパ系の人間はいるが、人間以外の動物は一切いない世界ということになる。

鳥が登場しないのはちょっと不思議だ。というのも、ガゼルの歌には鳥が登場するからだ。「鳥は空を飛ぶ、助走をくり返し。」というフレーズが歌詞には使われていた。

ただし、鳥がでてこないのには理由があるように個人的には思う。鳥がでてくると、ジュディが活躍するシーンがなくなってしまうのである。ジュディの活躍シーンがいくつか描かれているが、それらはすべて、鳥だと簡単に解決できてしまう。ジュディの勇敢さや能力の高さを前面に押し出すには、鳥の存在は邪魔になる。あくまで私の勝手な想像であるが。

『ズートピア』にはいろんな職業に就いている人たちがでてくる。ライフスタイルも多様であるかのように描かれている。『ズートピア』では動物たちは衣服を着て生活するのが通常ということになっているが、服を着ないで生活する集団も登場する。ヨガなどしながら一日を過ごしている、より「ナチュラルな」生き方を求める人々もいるよ、ということなのだろう。

けれども『ズートピア』には、いわゆるハイブリッドやハーフが登場しない。ウサギはウサギ、キツネはキツネ、ゾウはゾウ。ウサギとキツネのハーフは登場しない。ジュディとニックは恋愛関係に発展していく予感を観客に抱かせているように思うが、二人のあいだに子どもは産まれるのだろうか。

LGBTと総称される性的マイノリティの登場人物もない。障害者もない。

「みんな」のなかには、ハイブリッドもLGBTも障害者も含まれていない可能性がある。いや、たまたま登場しなかっただけかもしれない。映画の本編は108分しかない。登場はしたのだけれど、編集されてしまった、とか。でも現実の人間社会では、「多様性」といえば「LGBT」や「障害者」にかならずといってよいほど話がおよぶ。“子ども向け映画だから、多様すぎると話が複雑になってしまい、子どもたちには理解が難しくて映画が楽しめなくなってしまう。”そう判断したのかもしれない。“だから「みんな」には性的マイノリティもハイブリッドも障害者も含まれているんだ、この世に存在している人が「みんな」なんだ”と制作者側はいうかもしれない。

制作者側のこの言い分もわからないではない。たしかに複雑な話はわかりにくい。だからこそ、映画のようなメディアは「話をわかりやすくするために現実を単純化している」というこの事実を意識を向けることが重要となる。どういうことかというと、①現実映画よりもはるかに複雑であること、②にもかかわらず『ズートピア』のようなおもしろくて感動的な映画を観た人は、映画で描かれたような状況を「理想」と勘違いし、映画のように単純化された見方でしか世の中をみようとしなくなる可能性があること、③単純な見方に収まらない現実やメディアで描かれない現実がみえなくなったり、みようとしなくなったり、めんどくさいもの・余計なもの・邪魔なものとして切って捨てられたりする可能性があること、④複雑な現実の方が「間違っている」と考える可能性があること、などが推測されるということである。

だから、メディアで描かれないもの、登場しないものの存在について思いをめぐらせることは大切だ。メディアだけではなく、この現実の世の中にも、存在したかもしれないのに存在できなかったものの存在がいる。たとえば中絶手術によってこの世に生まれて来られなかった存在である。

5. この世に存在できなかった人

出生前診断という選別

「朝日新聞デジタル」の2018年3月19日付の記事「「命の選別」なのか 新型出生前診断、開始から5年」には、だいたいつぎのようなことが書いてあった。記事はまず新型出生前診断普及の経緯について紹介している。

妊婦の血液で、赤ちゃんにダウン症などがあるかどうかわかる「新型出生前診断（NIPT）」が始まってまもなく5年。これまで5万組以上の夫婦が受けた。日本産科婦人科学会は今後、実施施設を増やしていく方針だという。

赤ちゃんの染色体や遺伝子の異常を誕生まえに調べる検査には、体外受精した受精卵を調べる「着床前診断」と、妊娠後、生まれるまえに調べる「出生前診断」がある。出生前診断のうち羊水検査は、感度（精度）がほぼ100%と高く、確定診断に使われる。ただし約300人に1人の割合で流産のリスクがある。「超音波マーカー検査」は採血と超音波検査だけですみ、体への負担は軽い。感度は80～85%とあまり高くない。

新型出生前診断は採血だけですみ、感度が約99%と高く、検査が受けられる時期も長いのが特徴。微量のDNAを高速で分析できるようになって可能になり、2011年に米国ではじまった。専門知識が十分でない医療機関でも検査可能。国内では、十分なカウンセリングなどが伴わないと混乱が生じるとして、日本産科婦人科学会（日産婦）や日本医学会などが12年から実施体制を議論。遺伝に詳しい常勤医がいるなどの条件を満たす医療機関を認定し、臨床研究として実施すると決定。対象を原則35歳以上の妊婦に限り、調べる疾患も三つの染色体異常に限定。

認定施設は2018年3月19日現在90カ所。その大半が加盟する団体「NIPTコンソーシアム」によると、実施開始の13年4月から17年9月までに約5万1千組の夫婦が受けた。日産婦は2018年3月に臨床研究を終了し、一般診療として実施すると決定。実施施設は増える見通し。

NIPTコンソーシアム代表の左合治彦医師は「日産婦の指針には法的拘束力が無く、現状では無認可施設で十分なカウンセリング無しに検査が行われるなどの問題が起きている。今後は、医療機関に加えて検査会社も登録制にするなど、抜け道のない実施体制作りが必要です」と話す。

そして記事は、室月淳（宮城県立こども病院産科長）の見解を紹介する。

室月の病院では、国内で新型出生前診断がはじまった2013年から検査を実施し、毎年約250組の夫婦が受けている。夫婦が悩み苦しむ現場に立ち会い、医師として新型出生前診断について考えつづけてきた。夫婦には検査前の遺伝カウンセリングで、仮に胎児に病気がみつかったらどうするかをよく考えてもらう。「病気があっても産みます」という結論にいたった夫婦は検査を受けないので、検査を受けるのは病気がわかれば中絶を選ぶという夫婦が大半。

「新型出生前診断で病気がわかった夫婦の95%以上が人工妊娠中絶を選ぶことから、「安易な中絶が増えている」と批判する人が多いです。しかし、安易に中絶する夫婦など存在しません。

みな悩みに悩んだ末の選択です。中絶を選んだ夫婦、特に妊婦さんの悲しみや苦しみは、病気などで死産だった方と変わりません。

検査に対して、「命の選別だ」という批判もあります。遺伝情報や障害、病気で人を差別するべきではないという意味で、命の選別をするべきではないとの主張には全面的に賛成です。国家などが検査や中絶を強制することも許されません。

しかし、あらゆる出生前診断が「命の選別」と批判されることには、違和感を感じます。第三者が夫婦に対し、検査を受けることや結果を受けて妊娠をあきらめることを一律に禁じられるのでしょうか。どれだけ支援があっても、最終的に子どもの面倒をみるのは夫婦ではないでしょうか。

それに、染色体の病気がわかって中絶を選ぶ夫婦は、必ずしもダウン症候群などを差別しているわけではありません。家庭の経済状況など様々な個別で複雑な事情があつてのことです。個々の夫婦が置かれた状況はそれぞれ複雑で、異なります。夫婦も医療者も複雑な状況をどのように解決すればいいのか絶えず苦闘しています。そのような現場にいと、「命の選別を規制すべきだ」といった一刀両断の議論には、あまり意味がないと感じざるを得ません。

私の記憶では、「命の選別」という言い方が使われ始めたのは1990年ごろだったと思います。当時は、出生前診断のもつ本質的な問題をついた批判だと感心しました。しかし、それから30年近く経ち、産科医療をとりまく状況は大きく変わりました。出生前診断の技術も大きく進み、欧米では次の世代の出生前診断がすでに始まり、新型出生前診断がもはや「新型」と呼べなくなる状況です。「命の選別」と批判して新技術の可能性を遠ざけるのは、一種の思考停止ではないでしょうか。

テクノロジーの進展を止めることはできません。「命の選別」という使い古された批判を繰り返すのではなく、手探りでも、現実在即した解決策を模索していくしかない時期に来ていると思います」。

以上のように、室月医師は語る。

「みんな」に含まれない存在

記事はまだ続くが、ここでいったん、「みんな」とはだれのことなのか、という問いについて、この記事を参考に考えてみる。

新型出生前診断は、妊婦から採血するだけで、生まれてくる子がどんな病気や障害をもって生まれてくるかを、高い精度で診断できるようになった。手軽に検査が可能になり、専門医がいなくても医療機関でも精度の高い検査結果がだせる。検査前には遺伝カウンセリングを実施する。カウンセリングでは、もし胎児に病気がみつかったらどうするつもりかを夫婦によく考えてもらう。「病気があっても産みます」という夫婦はもちろん検査を受けない。「病気がわかれば中絶を選ぶ」という夫婦が検査を受ける。そして「新型出生前診断で病気がわかった夫婦の95%以上が人

工妊娠中絶を選ぶ」らしい。記事はこれ以降、中絶を選んだ夫婦を「安易な中絶だ」とか「命の選別だ」とかいて責める人びとに対する室月医師の反論が中心に展開されている。

室月医師のこの反論についてはいくつか違和感を覚える。たとえば、妊婦やその家族を悩ませるのは世間だけのように語っているが、①医師もその悩みに関係している可能性、および②中絶するという選択に医師の影響がおよんでいる可能性にまったく言及しない点である。のちほど後者②について考えることとして、ひとまずここで注目したいのは、「新型出生前診断で病気がわかった夫婦の95%以上が人工妊娠中絶を選ぶ」という事実だ。中絶を選んだ夫婦の動機や理由はさまざまであるのはもちろんだが、いずれにしても、病気や障害をもった子どもはこの世界では生きにくい、と考えられていることは共通しているように思う。

「みんな」とはこの世に生まれてきた人びと全員を指すとしても、この世に生まれてくることができるかどうか、「みんな」のなかに加えてもらえるかどうか、生まれるまえにすでに判断・選別されている。「命の選別だ」と批判しているのではなく、「命の選別」は実施・実行されていると指摘したいだけである。

「みんな」とは、この選別をくぐり抜けて、この世に生まれてくることができた人を指す。そしてこの「みんな」については多様性が尊重される。

すると、こういうことになる。あらかじめある一定の多様性や「違い」が削ぎ落とされたうえで多様性社会が目指されているのが、現実の現在ある社会ということである。

本来の多様性は、病気や障害がある人とそれがない人との「違い」を互いに認め、「同じ」人間だと尊重することなのだろう。けれども、胎児の遺伝子検査のように、ある種の「違い」をもつ可能性のある人びとについては、この世に生まれてくるまえに最新テクノロジーを使って発見し、生まれてこない側へと選別される。この選別は、社会からは見えにくいところで実施されている。そしてこのステージをクリアしてきた人びと、たとえば遺伝子検査で病気や障害をもつ可能性が低いと診断されてこの世に生まれてきた人びとだけが、この社会を作りあげる。そして性の「違い」や性的指向性の「違い」、人種の「違い」、宗教の「違い」などを認めあい尊重しあう社会を実現しよう、と唱える。それを多様性社会と呼んでいる。すごくうさんくさい感じがしてしまう。

妊婦に責任転嫁する社会

このみえにくい選別はだれがしているのか。事実上は妊婦が中絶を選んでいることになっている。しかし、ほんとうにそうなのだろうか。そこに嘘を感じる。

医師があるいは社会が、妊婦に中絶を選ばせているところはないだろうか。病気や障害をもつて生まれてくる可能性の高い胎児が生まれてこないように、妊婦はまるで社会の代理として中絶を選択しているのではないか。

そう考え解釈するきっかけとなったのが「ダウン症のない世界？」(NHKBS1放送)だ。私が

みたのは2017年7月5日放送分だった。制作は2016年となっている。イギリス人の女優で脚本家でもあるサリー・フィリップスが制作したドキュメンタリーである。彼女には息子が三人いて、そのうちのひとり（オリ）がダウン症。「私たちはどんな社会を目指すべきなのか？その社会にだれを受け入れるべきなのか」を問いかけるために、さまざまな人にインタビューし、一本のドキュメンタリーに仕上げた。

番組は基本情報の紹介からはじまる。イギリスでは妊婦は妊娠12週目の検診で胎児の発育状況や出産予定日を知らされる。このときダウン症の可能性を調べる検査も実施される。ダウン症を理由とした中絶は過去10年間で40%増加。確定診断を告知された妊婦の9割が中絶を選択すること。

このドキュメンタリーについて紹介したいことや検討したいことはたくさんあるが、問題を絞ろう。ここでは、あくまで中絶はだれが選んでいるのかという問いを考える材料に焦点をあわせよう。この問いに答えるのにヒントとなる発言がいくつかのインタビュー中にでてくる。

まず胎児医学の専門家であるキプロス・ニコライデスへのインタビュー（傍点は引用者）。

サリー・フィリップス「なぜあなたはダウン症の検査に重点をおかれたのですか？」

キプロス・ニコライデス「需要があると感じているからです。最大の目的は妊婦さんに情報を提供することです。一部の人はダウン症の赤ちゃんを授かるのは耐えがたいことだと考えているからです。」

サリー「ダウン症は悲惨なことではないと知ってほしいのですが、なぜみんなそう捉えるのでしょうか？」

キプロス「ダウン症について認識不足なのか。あるいはダウン症の子を育てるときの前向きな情報が足りないからなのかはわかりません。しかしダウン症を理解せずに、精神疾患と結びつける人が多いというのもしかしです。それに、ダウン症の人たちの寿命は伸びています。この症状を家族や社会への重荷と考える人にとっては、その重荷をこの先何十年も背負うのはたいへんなことでしょう。」

二つ目はリン・チティへのインタビュー。遺伝学／胎児医学の専門家らしい。前出の「朝日新聞デジタル」の記事でも紹介されていた「新型出生前診断（NIPT）」がイギリスでも導入されようとしているが、リン・チティはこの技術の開発者のひとりでもあるとのことだ。サリーは「妊娠中絶率の統計は複雑なので一概にいえないが、イギリス保健省の報告によると、NIPTの導入以降、ダウン症を理由とした中絶率は25%近く上昇した」との情報を紹介したうえで、リンへインタビューする（傍点は引用者）。

サリー・フィリップス「私のような部外者からすると、ダウン症が病気と同じようにあつかわ

れているのではないかと感じてしまいます。私はダウン症を人間の特徴の一つと考えています。ですから排除しようとするのは……」

リン・チティ「ちょっと待ってください。今、排除ということばを使われましたが、それは私たちの目的ではありません。それは起こりえません。とんでもないことです。ダウン症の人たちを全滅させようとしているなんていうジャーナリストもいますが、ありえないことです。

サリー「ええ、でもなぜありえないといえるのでしょうか。数字は逆のことを示していますよね。実際今の時点で……」

リン「問題は人びとがもしこうなったらという仮定に基づいた議論に終始している点です。でも肝心なのは、女性たちが明確な選択肢を与えられたときに、どういう判断をするのかということです。調査の結果、多くの女性があくまで出産を前提としたうえで情報を得るために検査を受けたことがわかりました。ただし、私たちの統計はまだ小規模なものなので、もう少し時間をかけて見極める必要はあると思います。」

サリー「高くつきますね。」

リン「いいえ、そんなことはありません。私たちは費用については明示していますが……」

サリー「ああ、いえ、費用のことではなくて、この検査はあなたがいうように、産むことを決めた女性があとで情報を得るための手段になるかもしれません。でも、その一方でダウン症の人たちに悲惨な結果をもたらす恐れもあります。」

リン「今のところ心配されているようなことにはならないと思いますが。あなたの息子さんは、おいくつですか？」

サリー「11歳です。」

リン「11歳。息子さんの将来についてはどうお考えですか？息子さんはあなたより長く生きると思いますが、そのときのことはどう考えていますか？」

サリー「そうですね。それでも私が中絶を選ぶことはなかったと思います。もし社会が個人の面倒をみることができなくなったら、それは個人のせいではなく社会の問題だと思いますから。」

三人目は、妊娠7ヶ月の女性、エマへのインタビュー。エマにはすでにダウン症の娘がいる。病院からは早めにダウン症の胎児かどうか検査を受けた方がよいと勧められたが、ダウン症の女の子を育てている自分にとってはそんな検査を受けることに意味はないから、検査は受けないし、今後この話はしたくないとカルテに記入するよう頼んだらしい（傍点は引用者）。

エマ「ところが病院に行ったらまさきに検査を受けると訊かれました。その話はしないように頼んだはずだというと、医師は、それでも話しあいたかった、って。傷つきますよね。娘と同じような子どもは望んでないとなぜ決めつけるのでしょうか？もしおなかの子がダウン症

だった場合、病院の人たちがどんな反応を示すかわかっているから、知られたくないのです。自分たちを守るために。」

サリー・フィリップス「あなたが検査を拒否したのは検査に意味がないからだけではないんですね。医師たちのハラスメントから自分や家族を守るために結果を知りたくない、と。」

エマ「ダウン症の子どもを授かることについて、根本的に理解がないんです。」

四人目は、ヘイリー・ゴレンウォイスカという女性。ダウン症の娘を出産したことをきっかけにブログを開設し、大きな反響があったらしい。出生前検査を受ける女性が増えるなか、ヘイリーは病院側の告知の仕方を見直すべきだと主張しているとのこと。NHS（国民保健サービス）の職員を対象とした講演でヘイリーはこう話す（傍点は引用者）。

ヘイリー・ゴレンウォイスカ「メディアは新しい出生前検査を無神経に賞賛しました。「苦しみ」の根絶に向けた大きな一歩だ」と。私たちはことばの重みに対しもっと敏感になるべきです。……みなさんのひと言が大きな影響を与えます。これは妊婦さんたちがじっさいにいわれたことばです。「明日の朝、中絶できますよ」「出産を望むなら転院を」「ダウン症の子はひとりですら十分でしょう？」。末娘を出産したあの瞬間のことは私の胸に深く刻まれ、生涯消えません。助産師の混乱した表情をみて、怖くてなにも訊けませんでした。私が“最大の悪夢”だとすり込まれていたことが起きたのだと直感したからです。助産師は泣きましたが、気の毒がってもらふ必要はありませんでした。娘は“リスク”などではなかった。火事や洪水のような災難でも、医学誌の1ページでもありません。今の気持ちでもう一度娘を産んだ日に戻れたら、どんなにいいでしょう」

専門家は、基本的に自分たちがしているのは「情報を提供すること」だけだ、と主張する。しかし、じっさいにおこなっているのは情報提供だけではない。

たとえばダウン症の子の「将来についてはどうお考えですか？あなたより長く生きると思いますが、そのときのことはどう考えていますか？」と質問する。検査は受けないと最初から申し込んでいる妊婦さんに対してもしつこく「検査を受けるか」と質問する。検査で陽性反応がでたら「明日の朝、中絶できますよ」「出産を望むなら転院を」「ダウン症の子はひとりですら十分でしょう？」と話す。

この専門家による情報提供や質問は中立的なのだろうか。高度なテクノロジーを使った検査の結果を伝えるだけと聞くと、客観的に中立的に情報が提供されているようなイメージを思い描いてしまう。しかも「「需要があると感じているから」情報提供しているだけであって、その情報に基づいて中絶するかしないかを選択するのは情報提供を受けた妊婦本人だ。私たちはなにも誘導していない」。専門家たちはそう述べることだろう。

けれども、この社会はダウン症を「家族や社会への重荷と考える人」が多い社会である。ダウン症を告知された妊婦のうち、ダウン症を理由として中絶する人が9割いる社会でもある。ダウン症の子を産むのは「最大の悪夢だ」とすり込む社会でもある。このような前提があるなかで、胎児がダウン症の可能性が高いという情報を提供され、「お子さんの将来のことを考えていますか？」と病院関係者に質問される。すぐに中絶できますよといわれ、産むならこの病院からでいいといわれたり「ダウン症の子をもうひとり産むつもりか？」と驚かれたりする。そういうふうにして妊婦が中絶へと追い込まれていく様子を想像するのはむずかしいだろう。

にもかかわらず、この選択は妊婦やその家族の「自己決定」であり「自己責任」だ、と社会は解釈する。妊婦たちに責任転嫁する。「命の選別をしているのは妊婦やその家族だ」と非難する。けれども、この選択に医療の専門家たちが関与していないとは考えにくい。かといって、今度は医療の専門家を責めればすむというわけでもない。ダウン症を「家族や社会への重荷と考える人」たちの代理として、医療の専門家は中絶へと誘導し、妊婦たちも中絶を選んでいるのではないか。このことを実証することはできないけれど、可能性は十分にあるのではないか。ここでは、一応仮説にとどめておいて、これまで考えてきたことをふまえて、あらためて国交省の「多様性社会シナリオ」を検討してみよう。

「多様」であるとはどういうことか

ここまで考えてきてみてきたのは、多様性を唱える主張はいろいろあるけれども、どこかその多様性には条件があるように感じる、ということだ。条件を満たした人びとについては「違い」を認めよう尊重しよう、という主張のように読みとれてしまう。

そもそも「多様である」とはどういうことなのだろう。

「シナリオ」の「側面ごとにみた内容」に「多様性」という項目がある。その最初に明示されているのが「多様性を大切にしたい世界一の環境先進国を目指す（ダイバーシティがキーワード）」（傍点は引用者）とある。

「世界一」？ 「世界一」という発想ぐらい多様性と相容れない考え方はないのではないだろうか。そんなことをいうと、「ああ、あなたは「二位じゃダメなんですか？」と考える立場なんですね」と解釈する人がでてくるかもしれない。しかし私の立場はそういう立場でもない。そもそも一位を目指す人も「二位じゃダメなんですか」という人も順位を話題にし自明視している。

多様性を実現しようとする発想は多次元的であるのに対し、一位か二位かと順位を問題にする発想は一次的であり、カースト的でもある。

「世界一」になるには「世界一」だとだれかに評価されないといけない。順位が決められないと無意味になる。そのためには順位を決めるための基準や尺度が必要となる。基準や尺度は「ものさし」とも言い換えられる。

どんなことでもそうだが、一位と認められ評価されるには、なんらかの一次的なものさし

が要る。そして共通のものさしで測定する。「100m走の一位」とは、「同じスタート地点を同時にスタートして走りだし、100m先のゴールに最初に到達した人が一位」ということであり、「100mという距離を走るのに要した時間」が尺度だ。100m走の参加者は全員この共通のものさしによって測定され、順位が決められる。「順位尺度」と呼ばれているものだ。

別々のものさしを使って測定しても、順位は決められない。長さというものさしで測定したものと重さというものさしで測定したものを比べる。たとえば身長が一番高い人と体重が一番重い人を比べる。比べることはできても、どちらが一位かは決められない。だから順位を決めるには同じものさしで測定し比較しないとイケない。

しかも順位を決める場合、往々にして競争がおこなわれる。スポーツも勉強も仕事も競争の結果を測定して順位を決める。「勝ち組／負け組」とか「スクールカースト」とかの場合にも競争がおこなわれ、なんらかの基準でなんとなく順位が決められている。

つまり「シナリオ」は新しい発想などではまったくない。相変わらずの、従来からある、そういう発想から脱出しなければならないはずの、まさにその発想そのものなのである。

多様であるとは、共通のものさしによって測定できるものではない。

役人の立場

しかし、それでは多様性社会を実現したかどうか、どの程度実現したかはわからないことになるじゃないか。国交省の役人たちはそう非難してくるだろう。しばらく役人の身になって考えてみよう。スロー・シンキングするには、たとえ共感できない相手であっても、その人たちの身になって考えることも大切だろう。

役人は税金から給与が支払われ、税金を支払った人びとの役に立つような政策を考えだし、税金を投入してその政策を実現しないとイケない。実現できなかったり、実現した結果が納税者の利益にあまりならなかったりしたら、「税金ドロボー」などと心ないことばを投げつけられて非難されてしまう。

では、政策が実現できたかどうかはどう判断され評価されるのか。納税者のだれがみても「実現した／していない」が判断できるのが望ましい。たとえば多様性社会は実現したのかできなかったのか、「世界一」になったのかどうかについて、役人はどのようにして納税者に説明するか。納税者はなにをみて役人の仕事の成果を評価すればよいのか。

一番ポピュラーなのは数字だ。「シナリオ」にもあったように、たとえば「人口の20%は外国人が占める」という目標数値を定め、さまざまな政策を実行することで、結果として「人口の20%は外国人が占める」ことになったという統計データを提示できれば、政策目標を「実現した」と納税者は判断できる。役人も自信をもって納税者に自分たちの努力の成果を誇れる。

たとえば「障害者雇用促進法」によって国や都道府県等の機関は障害者の雇用率が2.3%になるよう義務づけられているにもかかわらず、2018年8月前後に、経済産業省をはじめとして、中

央省庁が障害者ではない職員を障害者としてカウントして法定雇用率を達成しているかのようにみせかけていたことが次々に明らかになった。

いかに障害者を雇用しようとしていないかが明白なのだが、ここで注目しないといけないのは、数値目標を設定・明記しているがゆえに達成しているかないかがはっきりわかる、という点である。そして今回はじっさいには達成していなかったことが明確になり、さまざまな非難を納税者や障害者支援団体などから受けることとなっているわけだ。

いつの間にか役人の身になって考えることからずれてしまったけれど、役人からすれば、多様性社会を実現するという目標を実現しようとすると、一元的な発想になり、数字によって一元的に表現せざるをえない。つまり、政府が多様性社会を実現することには根本的な矛盾がつきまとうてしまうのである。

6. 「コスパ」の思想と多様性

GDPとコスパ

政府が作成した「シナリオ」が一元的な発想になってしまう理由は他にもある。政府あるいは役人は、納税者の期待に応えるように政策を立案し実行しないといけない。それはさっきも指摘した。

政府や役人は納税者の期待をどのように知るのだろうか。いろんなチャンネルがあるだろう。たとえば新聞やテレビの世論調査。あるいは選挙のとき。納税者や有権者に「どのようなことに一番関心があるか」をメディアは尋ねる。ほとんどの場合、「経済や景気をよくしてほしい」といった回答が一位にランクされる。では経済や景気がよくなったかどうかをどのようにして判断するか。さまざまな指標があるが、もっともよく取りあげられるのがGDP（国内総生産）の数字だ。GDPは一国全体の裕福さを表す数字でもある。

さらに、財政赤字の問題や税金の使い道の問題についてもメディアはよく取りあげる。高齢化によって社会保障費が膨れあがり、ますます財政赤字がひどくなる。公的年金制度も破綻するかもしれない。こういった問題も、景気がよくなりGDPが上がって、法人税や所得税、消費税等の租税収入が増えれば、解決につながる。

いずれにしても、政府にはGDPを上げるという基本的関心がある。それが大前提なのだ。だから「シナリオ」作成にあたってGDPの上昇という基本枠組みが潜んでいても不思議ではない。“そんなこと、一々はっきり明記しなくても、あたりまえ”と「シナリオ」作成者たちは、わざわざそれをはっきりさせようとするここでの論述をバカにするかもしれない。

また役人は「納税者庶民の「血税」をムダにしている、民間企業と同じように努力して「血税」を有効に使え！」というような批判を、直接あるいはメディアを通して間接的に、さんざん聞かされている。

お金を有効に使うことを最近では「コストパフォーマンス」、通称「コスパ」と表現するようだ。2018年8月25日にはNHK総合で『消費者第一主義バラエティ コスパ!』という番組をやっていた。その映像に登場する芸能人や一般視聴者たちをみていると、「費用対効果」という日本語より「コスパ」の方が日常語化しているようだ。

費用（コスト）をできるだけ減らして利益や効果（パフォーマンス）をできるだけ大きくするという経済活動の基本原則にすぎないのだが、政府も民間企業のような考え方にしたいが、それを徹底しようとしている。

GDPを上げること。コストを極小化しパフォーマンスを極大化すること。これらの関心が「シナリオ」の内容にも反映している。たとえば、「シナリオ」の「ライフスタイル」の箇所に、「寝たきり老人を予防する社会へ」という項目がある。なぜ寝たきり老人の予防をわざわざ「多様性社会シナリオ」に含むのか。それは寝たきり老人が「コスト」だと考えられているからだろう。

最近「介護離職」が問題化されている。働き盛りの40～50代の男性が親の介護のために退職しなければならないケースが増えているというドキュメンタリー番組などが制作されている。なぜ「介護離職」は問題なのか。寝たきり老人は社会保障費の対象になる、つまり「コスト」になるのに対して、GDP上昇に貢献してくれそうな人が退職してしまう。寝たきり老人はGDPを上げてくれない。「コスト」を減らし、GDPを上げてくれそうな働き盛りの人に働きつづけてもらうには、寝たきり老人の予防がもっとも有効である。

さらに、「シナリオ」には何度か「資源循環型社会」ということばが登場する。「シナリオ」はこのことばについて「自然のリズムにしたがい、自然の流れと共生する」とか「かつての江戸時代の」としか形容していないので、具体的にどういうことを意味しているのが明確ではない。ただ、ゴミという「コスト」を可能なかぎりなくしたいという関心は読みとれるだろう。あくまでもイメージにすぎないのだが、「かつての江戸時代の資源循環型社会」では、生活ででたゴミは現在でいうところの「生ゴミ」あるいは「可燃ゴミ」がほとんどである。そのへんに捨てても土に返っていき、排泄物と同様に、肥料となる。プラスチックのゴミのように、分解されるのに時間がかかるわけでもない。海に漂う微少なプラスチック・ゴミを体内に取り込んだ海洋生物が死んだり、食物連鎖で結局そのゴミが人間の体内に入ってきたりするという事もない。

それに対して現在われわれがだしているゴミは分別しないといけなくなっている。処理するには大規模な施設が必要だ。ほとんどは焼却処分される。燃やすための「コスト」がかかる。残った灰をそのへんに撒くことはできない。決められた場所に埋めなければならない。そこまで運び埋めるための「コスト」がかかる。リサイクルされるものもあるとはいえ、紙にしるペットボトルにしる、リサイクルする方が「コスト」がかかるという話はよく聞く。“リサイクルしてますよ、環境にやさしい会社ですよ”というイメージを消費者にもたせようと考えて、パルプから作っていたのに“再生紙です”と明記してトイレットペーパーを販売していた製紙会社があった。こんな不正をしていたのも、再生紙を作る方が「コスト」がかかるからである。

このように「かつての江戸時代の資源循環型社会」も「コスバ」思想の表れと読みとることができる。そして、GDPを上げてくれるなら、「コスト」を減らしてくれるなら、「人種・性別・年齢など」がどうであろうと、そんなに問題ではないという価値基準が潜んでいるようにも思うのである。

「女装男子」

同じような価値基準はほかにも指摘できる。一例としてあげたいのは、『かんさい熱視線』（NHK総合）「性別にとらわれないファッション “自分らしさ” を着る」（2018年7月13日放送）の回である。進行役のNHKアナウンサーのほかに、「ジェンダーレス男子」と呼ばれるタレント、「ジェンダーの視点から多様な社会のあり方」を研究している学者が出演していた。

番組の主旨は、この世の中にある服装は男物／女物に分けられ、生物学的に男性とみなされている人は男物しか着られず、生物学的に女性のカテゴリーに入る人は女物しか着られないのはおかしいと考え、男物／女物という分け方にこだわらずに自分の着たいものを着る人、自分らしさを表現できる服装をする人の活動や生活を紹介することにある。

たとえば、生物学的・身体的には男性なのだが「心は女性」と話す人、いわゆるトランス・ジェンダーのNさん（26歳）は、ずっと女物の服を着たいと思い、じっさいに女物の服装で街にでかけたりしてきた。しかし、女物の服装と男性的な身体（肩幅が広い、腰が太い、など）とが合っていない感じがして、街ですれ違う人びとの視線が気になって仕方がなく、自信がもてなかった。そんなNさんはあるファッションショーのことを知った。そのファッションショーを企画した女性デザイナーは小さいころから男の子がするようなことに興味があったため、周囲から「もっと女らしくしなさい」と叱られ、それに反発を感じながら生きてきたらしい。そういう経緯もあって「男性の体型でも美しく見える服」をデザインすることを考え、Nさんのような人たちにモデルになってもらうことになった。

「男性でありながらも、かわいくありたい、美しくありたい、と考えて、ユニ・セックスな服装をしてきました」と語るひとりのモデル。Nさんもこのショーをとおして「ずっと否定してきた自分を、少しずつ肯定できるようになってきました。自分が自分でいられるうれしさを、すてきな服を着てみせられればいいなと思っています」という。

こういったファッションをする人たちについて紹介したあとに、番組ではLGBTの解説がなされた。注目したいのは、その解説に使われていたフリップに「市場規模5.9兆円」の文言があったことだ。そうして番組内の話題も、性別にこだわらないファッションが「ビジネスチャンス」になるという内容に移っていく。「東京レインボープライド」というLGBTの祭典に協力し、従業員はみな「LGBT研修」を受けて胸にはレインボーのバッジをつけなければならないあるデパートでは、男性でも履けるように27.0cmの女性くつが並べてあったり、小柄な女性のための男性用スーツが陳列してあったりする。「服が売れない時代」にあって衣料品業界は「生き残り」

を賭け、このような「性別にとらわれない多様なファッション」を新たな市場として開拓している、と番組は解説する。

LGBTだけでなく趣味でジェンダーレスの服装をする人も番組では紹介されていた。ある男性は仕事（薬剤師）の場では男性の服装だが休日は女装して街にでかけるという。女装することで「積極的に人と関われるようになった」と語る。趣味で女装する人たちを「女装男子」や「男の娘」と呼んだりするとも紹介されていた。「この女性物の帽子は〇万円で買った」などと「女装男子」の集まりに参加している人たちが話しているシーンも流されていた。

市場と多様性

自分らしく生きられるようになったり、自分の個性を気兼ねなく表現できるようになったりするのには、スロー・シンキングの目指すところでもあるので、番組をみていて「よかったなあ」と感じる。けれども、この番組の枠組みや前提には違和感を覚える。

“LGBTの人びとだけでなく、趣味で「女装男子」している人たちも増えてきていますよ。女性（男性）用の服を着たりくつを履いたりしたいのに自分の男性（女性）の身体に合うものがない、合うものがほしい、という「ニーズ」をもっている「消費者」がいますよ。これは「ビジネスチャンス」ですよ。「新たな市場」を開拓するチャンスですよ。市場規模は5.9兆円と試算されています。日本の景気をよくすることに貢献できるじゃないですか。いままでのような考え方は服が売れてないじゃないですか。「ニーズ」をさらに「掘り起こす」ことだってきっと可能ですよ。もしLGBTの人たちや異性装を好む人たちへ「偏見」があるのであれば、そんなものは捨てましょう。そんな「偏見」をもっているかぎり「ビジネスチャンス」を逃してしまいます。あの人たちはLGBTじゃなく変な人でもなく「消費者」なんです”。

こういうふうに視聴者に呼びかけていると私には読めてしまう。視聴者には「偏見」があると決めつけそれを前提に番組が作られているように感じられるのも気分が悪いのだが、もっと気がかりなのは、市場や消費、「ビジネスチャンス」に貢献する多様性は認めるが、それらに貢献するとは想定されない多様性を軽視・無視することにつながるのではないかと考えるからである。

不自由な思いをしてきた人びとが、GDP上昇、市場開拓、「ビジネスチャンス」などの消費資本主義社会の基本的関心・前提を活用して、より自由に、気楽に、自分を表現できるようになる。それはひとつの社会運動であり、有効な戦略なのだと思う。けれども、この戦略は両刃の剣でもある。市場開拓や「ビジネスチャンス」に貢献しなさそうな多様性については考慮に入れられず、「ないもの」「存在しないもの」とされる可能性がある。そういう状況を生みだしてしまう可能性がある。ほんとうに多様性を大切にするならば、このことを見落としてはいけないと思う。

他者はこちらの理解をいつも超えている

“おまえはお金に苦労したことがないから、貧乏した経験がないから、そんなことがいえるんだ。経済ぐらい大事なことはない。だから社会がGDPを上げること、市場を開拓すること、「ビジネスチャンス」をつかもうとすることを優先するのはあたりまえだ。競争に負けたらどうするんだ。人間は喰っていかなければならないんだ。市場を開拓できれば職も増える。給料も増えるかもしれない。政府も税金が増える。そうなれば個人的によりよい生活ができるようになるだけでなく、社会保障も充実する。そういうことも考慮に入れずに、なにがスロー・シンキングだ！”などと非難されそうな予感がする。

私は私なりに貧乏のつらさを経験してきたつもりではある。「喰っていけること」の大切さも無視するつもりはない。けれども、こういう経済至上主義的な意見には強い違和感がある。経済を最優先しない意見や考えを封殺しようとしていると感じるからだ。

くり返しになるが、働いて収入を得ることは生きていくうえで優先順位の高い問題である。けれども、優先順位が高いのと、それにしか関心をもってはいけないのとは違う話だ。そもそも収入を得るために生まれてきたわけではない。それに、本音では経済が回っていけばそれでよくて、多様性自体はその手段のひとつでしかない、と考えているように感じる。

また“少数派になったこともないおまえには性的マイノリティの人びとの苦しみがわかるはずがない。だから、そんなことをいうんだ。社会の多数派とは異なる自分のセクシュアリティを周囲に知ってもらうこともできず、告白したらしたで異様な物でもみるかのような視線を向けられるんだぞ。いつのまにか自分でも自分を否定し見下すようになって、死にたくなったりもするんだ。その苦しみがわかるか”といった非難が向けられそうな気がする。もしそう非難されたら、たしかにそのとおりです、と答えるしかない。ただし留保条件があって、性的マイノリティにかぎらず、他者の苦しみがほんとうにはわかるはずはないと思う。苦しみだけではなく、よろこびも悲しみも不安もほんとうのところはわからない。「たぶん、こんな感じじゃないか」と想像することはできるし、しているつもりでもある。だが想像したあとには「でも、ほんとうのところはわからないけど」と付け足す。

もうひとつ、この架空の非難に対して感じるのは、どうして私が少数派になったことがないと決めつけることができるのか、という疑問である。多数派とされている人たちにも、セクシュアリティとは異なる部分に関しては少数派になった経験があるかもしれないのに、多数派とされる人びとはあらゆる属性において多数派であるかのように決めつける点に違和感があるということである。日本で生まれ育った異性愛者の私は、日本社会というコンテキストにおいて人種的・性的には多数派なのかもしれないが、色弱であるため、色の区別について、いろいろ嫌な思いをし、“自分は異常なんだ”と感じたことはある。その経験をもとに、少数派となってしまった人のつらさを想像する。けれどもやはりそれは想像なので、他者のつらさが「ほんとうのところはわからない」と思っている。他者のつらさが完全にわかるという超能力は私にはない。

学校を通じて多様性を知らせる？

ある条件を満たした人びとの多様性は尊重するが（いや、問題にしないが、といった方がより正確かもしれない）、条件を満たさない人びとの多様性については優先順位を低く見積もる。多様性を目指していることになっている現在の社会の状況でじっさいに目指されているのは「コントロールされた多様性であり」「制限された多様性」ではないか、という解釈が私にはますます正当なような気がしてきた。

そういうふうに私が述べるのを聞いたら「シナリオ」作成者たちはつぎのように反論したくなるのではないだろうか。“たしかに「制限された多様性」かもしれませんが。現状は不完全です。あなたに指摘されなくても、そのことは認識しています。だからその「制限」がなるべくすくなくなるように今後も努力や工夫をしていこうとしているんじゃないですか。「シナリオ」の「課題」のところにも「国民全員が多様性を知る」という項目があるでしょ。日本国民にさまざまな機会を通じて多様性について知ってもらったり考えてもらったりして、「制限」が可能なかぎり加えられない多様性に近づこうというのが私たちの立場なんです”というふうに。

しばらくこの点について考えていくことにする。「国民全員が多様性を知る」という「課題」に取り組むとき、政府がまっさきに活用しようとするのは学校だろう。もちろん学校教育を終えて就労している人びとを対象とする場合は、学校とは別の場所で「多様性を知る」機会を設けようとするだろう。先述したように「LGBT研修」を実施しているデパートはすでにある。こういう研修をおこなう企業には助成金などが支給されるかもしれない。けれども未来を担う予定の子どもたちこそ「多様性を知る」必要が高いと「シナリオ」制作者や政府関係者は考えるだろう。そして学校教育を通じて子どもたちに多様性を知ってもらおうと教育委員会や学校現場に働きかけることが予想される。

では、学校教育を通じて生徒や学生に多様性は知ってもらえるのだろうか。知識としては生徒・学生に知ってもらえるだろう。「多様性が大事」と生徒・学生は試験や面接、レポートで答えるだろう。教員もそういう解答をみたり聞いたりして、多様性を知ってもらえたことにするだろう。

これはほんとうに多様性を知ったこと、知っていることになるのだろうか。学校というところは本質的に多様性と矛盾するだけでなく、多様性を損なう場所・機関ではないだろうか。

というのも、学校は評価し選別する機関だからである。学校に通う生徒・学生たちにとって、評価されることはとても切実なテーマである。ひとつの共通のものさしで学力や態度などを計測・数値化し、その成績にもとづいて生徒・学生を一元的に序列化するのが学校の仕事だ。多様性といっても、数直線上に並べられた生徒・学生の成績の順位が多様であるにすぎない。

学校がどのようにして人びとを選別しているのかについて、スロー・シンキングはまだまだつづいていくが、今回はここまでとしておこう。

本稿はここまでで論文約二本分の分量を使っている。しかし、内容としてはおそらく一本の論文の一節分ぐらいにしか相当しないだろう。あれやこれや読んだり考えたりメモをとったりしたもののほとんどは論文には直接は表現されない。ではムダなのかというと、そうなのかもしれない。ただし、ムダになるかどうかはあとにならないとわからない。いつか生かせるときがくるかもしれない。もちろん、こないかもしれない。そんな不確かさを思いながらも多くの社会学者は研究の最初期段階でスロー・シンキングしている。それが初学者に伝われば本稿の目的は果たされたといえよう。

